

後天性の肺動脈弁狭窄が疑われた心房中隔欠損症の1例

◎川村 奏志¹⁾、徳弘 将光¹⁾、平川 大悟¹⁾、池田 智江¹⁾、中村 妙¹⁾、谷内 亮水
土佐市立土佐市民病院¹⁾

【はじめに】石灰化による大動脈弁狭窄症は比較的良好に経験されるが、肺動脈弁狭窄症 (PS) はその多くが先天性であり、後天性 PS は稀である。今回、我々は経胸壁心臓超音波検査 (TTE) にて石灰化を伴った後天性 PS が疑われた症例を経験したので報告する。【症例】80 代男性、11 年前に他院で静脈洞型心房中隔欠損症 (sinus venous ASD)、部分肺静脈還流異常 (PAPVC)、慢性閉塞性肺疾患の診断を受け、当院にて経過観察されていた。4~5 日前より全身の浮腫がみられ、呼吸困難も出現したため当院を受診した。血液検査では NT-ProBNP が 4877pg/mL、BUN が 42.6mg/dL、CRE が 1.92mg/dL、Hb が 11.5g/dL と心不全マーカーの上昇、腎機能障害、貧血を認めた。心電図検査では、心房細動、心室期外収縮、不完全右脚ブロック、四肢誘導低電位差を認めた。TTE では右房と右室は拡大し、心房中隔に欠損孔と左-右シャント血流を認めた。中等度の三尖弁逆流を認め、70.5mmHg の圧較差が認められた。肺動脈弁のドーミング、前尖と左尖との交連部の石灰化と癒合を認め、二尖様に観察された。最大肺動脈弁通過血流速度 (PVmax

) は 4.2m/sec と増加しており、PS が疑われた。主肺動脈は 70mm と拡大していた。胸部 CT では著名な心拡大、心嚢液貯留、肺動脈の著明な拡大と肺動脈弁の石灰化、右胸水、全身浮腫を認めた。【考察】11 年前に他院で実施された造影 CT では肺動脈弁は三尖で良好に開閉し石灰化は認められず、TTE では PVmax は 3.1m/sec で肺血流量の増加に伴うものと考えられた。CT を確認すると 9 年前には肺動脈弁の石灰化は認められず、2 年前の CT で石灰化がみられた。先天性 PS に石灰化を伴ったとする報告は散見されるが、PS を伴わない肺動脈に石灰化が生じたとする報告は少ない。本症例は造影 CT より 11 年前には PS はなかったと考えられ、後天性 PS が疑われた。ASD と PAPVC の存在が肺動脈弁の石灰化の大きな要因であると推察される。短絡血流及び還流異常による右心系への容量負荷、さらにこの負荷が長期化したことにより、肺動脈弁の石灰化が惹起されたものと推察された。【結語】浮腫を主訴に受診し、心不全精査目的で施行した TTE にて後天性の石灰化肺動脈弁による PS を経験した。連絡先 088-852-2151